

5-2 登山 ～北アルプスの玄関口～

北アルプス・槍ヶ岳方面へのアプローチは、自動車交通の発達・変化に伴い、現在では松本市、上高地側からが主流となっていますが、古くは市街地から槍ヶ岳まで最も近い位置に大町市が槍ヶ岳への玄関口の役割を果たしていました。

■ 北アルプス登山の玄関口

北アルプス登山は明治時代から徐々に盛んになりました。大町市は、北アルプスを控える立地から、大正6年(1917)日本で最初の登山案内者組合が設立されました。大正2年(1913)に陸地測量部発行の5万分の1の白馬岳、黒部、大町、立山が発売され、大正5年(1916)に信濃大町駅が新設されたことから、登山客は年々増加していきました。

昭和20～30年代、信濃大町駅には早朝から学生や社会人を中心とした登山客が列をなし、バスで北アルプスの峰々へ向かうという、大町市はまさに「登山のメッカ」でした。



写真 5.3 登山客でにぎわう信濃大町駅前 (出典:38)

■ 電源開発当時の北アルプス登山

高瀬川沿いに行く北アルプスへの登山道と、高瀬川沿いの電源開発に伴う軌道とは、ルートが同じでした。昭和40年代は、登山ブームと新高瀬川発電所の工事時期が重なりました。高瀬ダム建設を描いた曾野綾子氏の『湖水誕生』では、道路改修や、山の表土はぎ、伐採、測量、架橋工事、土砂の運搬などの工事区間を通る登山者に、白い保安帽を貸し、それを約7km上流の“濁り”で返してもらっていたという、当時の手法が描かれています。



■ 登山ブームの変遷

～北アルプス山小屋関係者のお話～

これまでの北アルプスにおける登山客層の変遷、逸話などを、山小屋関係者にお聞きしました。

【株燕山荘 代表取締役 赤沼健至氏】

- ・大正末期から昭和20年代前半の登山客は、主に文学や芸術に親しむ人や富裕層が中心であり、昭和20年代後半から昭和50年代前半になると若い男性が中心となった。この頃はエベレストをはじめとする8000m峰が相次いで初登頂され空前の登山ブームであった。昭和50年代後半からは中高年が中心となり、現在は子供から高齢者まで幅広い年代層が登山を楽しむ時代が到来している。



- 昭和初期地形図に記載され現在もある登山ルート
- - - 昭和初期地形図や過去のガイド地図等に記載され、現在は使われていない登山ルート
- 電気軌道
- 馬車軌道
- 旧発電所位置
- 昭和初期地形図に記載されている主な山小屋

図 5.5 昭和初期における高瀬渓谷から北アルプスへの登山道及び電気・馬車軌道 模式図

(出典：33,39,40 及びヒアリング調査より作成)

この図は、国土地理院発行の 5 万分の 1 旧版地図(立山、槍ヶ岳、大町、信濃池田(昭和 7~8 年発行))を使用したものである。

登山の利用者層は 30 年周期で変化している。

- ・昭和 40 年代後半から昭和 50 年頃までは、燕山荘宿泊者の 80%は槍ヶ岳を目指していた。燕山荘から槍ヶ岳までは約 9 時間かかるため、登山客の出発は早く、朝 4 時の朝食には、食堂前に長蛇の列ができ、朝 6 時には誰もいなくなる毎日だった。

【七倉山荘 田中豊氏】

- ・昭和 40 年代のピーク時には、年間 1 万 2 千人(烏帽子岳等の裏銀座方面へ 1 万人、湯俣方面へ 2 千人)の登山客があった(※1)。
- ・湯俣の晴嵐荘には、登山ピーク時には一日 200 人宿泊した実績がある。

(※1：東京電力七倉通行ゲートでカウントしている現在の登山利用者は、入山者と下山者を合計して 9928 人、タクシー利用者数(七倉~高瀬ダム) 17,606 人(H26 年度実績))

【コラム】

『湖水誕生』に描かれた登山ブーム

『湖水誕生』(曾野綾子著、昭和 60 年 1 月)は、高瀬ダム建設(昭和 44 年着工、昭和 54 年竣工)を描いた作品です。

著者は高瀬ダムの現場に 7 年間熱心に通いつづけ、ダム工事作業を繰返し見聞し、時に作業を体験し、ロックフィルダムの施工プロセスを事細かに、湖水誕生までを書きおろしました。

この湖水誕生の中でも、昭和 40 年~50 年代は槍ヶ岳、烏帽子岳、野口五郎岳など北アルプスを目指す登山者が非常に多い登山ブームで、梅雨明け頃から登山者が急増し、1 日 300 人ほどになることもあったと描かれており、当時の北アルプス登山の状況を垣間見ることができます。

槍ヶ岳・燕岳の登山ルート

山小屋関係者から、槍ヶ岳、燕岳に向かう登山ルートに関するお話をお聞きしました。このお話や過去の地図等をもとにルートを作図したのが図 5.7 です。(この図では、現在廃道になっているかつての登山道は、破線で示しています)

<山小屋関係者からのヒアリング記録概要>

◇カモシカ新道：ルート上にコブがニヶ所あり、尾根付近で底が抜けて廃道となった。昭和 52~53 年頃修復されたが、いずれは崩れるだろうといわれていた。高瀬ダムの建設頃から登山者が減り、現在は廃道となっている。

◇川九里沢：ルート上に滝があり、ザイルが必要。

◇東沢：昭和 50 年代まで営林署の方々が行き来していた。距離はあるが、緩やかな登りでおすすめるルートである。現地には土石流対応の堰堤が複数建設してある。工事等のために当時は索道が張られ、物資を運んでいた。索道は平成元年頃撤去された。

◇燕山荘では、中房温泉側から燕岳、大天井岳まで登山道の整備を行っている。東沢側からのルートは整備できていない。

○宮田新道：つり橋の落橋、千天の出合までの登山道再整備が必要な状況。

○平成 10 年頃、大町市の観光課やガイド組合の方々と晴嵐荘から千天出合まで登ったが、約 4km を 1 時間程度で行けた。

□宮田新道：現在は川歩きが必要であり、まき道やくさり場、はしご 2 か所の整備が必要。

◇燕山荘 赤沼健至氏 ○槍ヶ岳山荘 穂苅康治氏
□七倉山荘 田中豊氏